そのとき、現地の基幹災害医療センターの病院はどう動いたか

（尾崎　雄、河野龍太郎、看護管理 15(3): 84-93, 2005）

2013 年 5 月 10 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

医療職はいつ何時災害医療の最前線に立たされるかわからない。そのため、その時に備えるための危機管理の基本を知っておく必要がある。

中越地震の被災地で実際に医療を行った長岡赤十字病院の院長と、魚沼病院の看護部長の話より、災害時、基幹災害医療センターに求められていると思われるのは、①通常時医療の継続、②災害時医療を行う機関として機能すること、③地域災害医療の中核として機能すること、である。

① 通常時医療の継続

災害時、最初に行うべきこととして、入院患者の安全確認と病院の被害状況の把握である。災害時は電話などが使えず、連絡手段がないことが多いので、災害対策訓練や防災マニュアルによって、医療者はどのように動くべきか知っておくことが大切である。また、入院患者の負傷の有無だけでなく、地震への不安に対する心のケアも重要である。

② 災害時医療を行う機関としての機能

災害時は基幹災害医療センターとして、前方連携、後方連携を行わなければならない。被災地の病院から患者を受け入れる体制を作ったり、前から入院していた患者や新たに運ばれた被災者をさらに別の病院に移すなどの連携を行える体制を作ったりしておかなければならない。

また、人員を他の病院から確保する必要もあり、病院間のネットワークの構築は非常に重要である。

③ 地域災害医療の中核として機能すること

救護班の派遣を通して、災害地域の医療の指揮を行うのも医療者の仕事である。チームが有効に機能するためには、災害対策本部などから適切な指示が出る必要がある。いくら多くの医療チームがあったとしても同じ場所にばかり集まり、けが人が出ていて孤立している地域での医療が行われなければ意味がない。そのためにも被害状況などの情報を一か所に集める体制が不可欠である。

以上のような連携や体制を整え、実際に災害が起こったときに機能させるためには、防災マニュアルの作成や災害訓練は欠かせない。実際に災害医療を行った人たちの経験を参考により良い災害医療に対する準備をしておくべきである。